

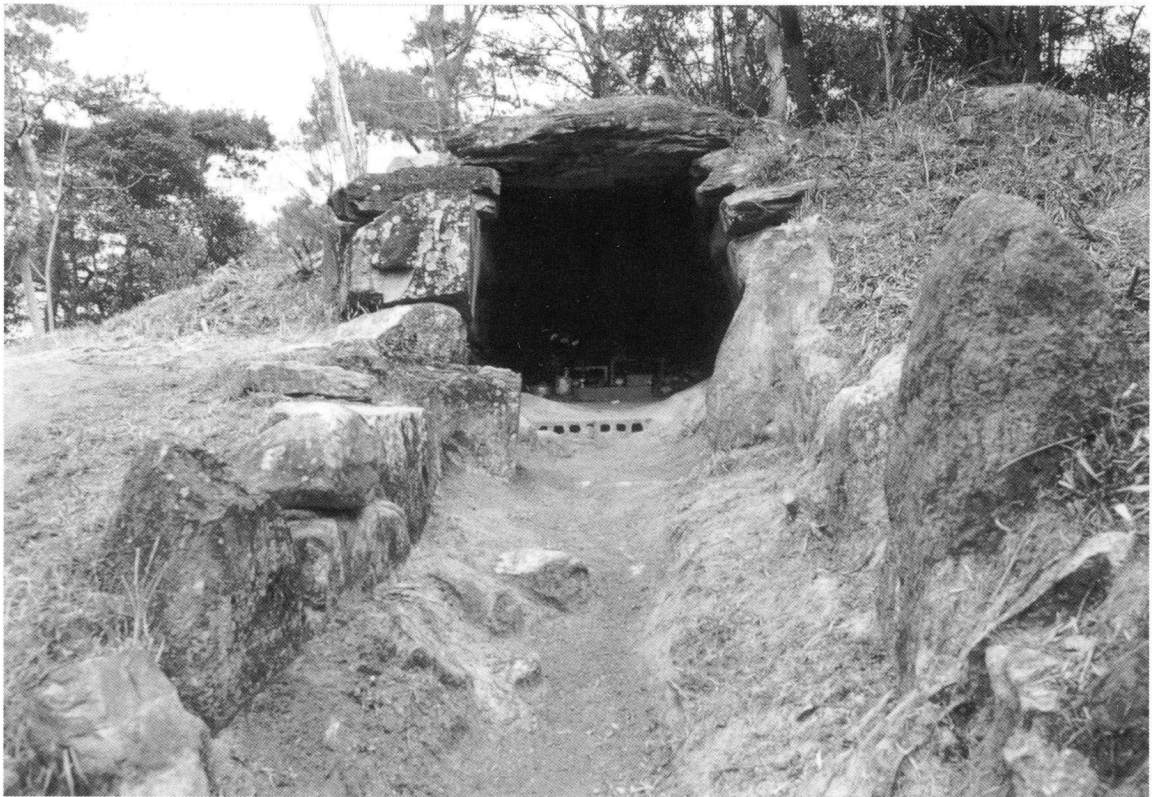
観音寺市内遺跡発掘調査概要報告書

平成12年度国庫補助事業報告書

詳細分布調査概要報告書

2001. 3

観音寺市教育委員会



興昌寺山1号古墳の石室

例 言

1. 本書は、観音寺市教育委員会が平成12年度国庫補助事業として実施した、観音寺市内遺跡発掘調査事業の詳細分布調査概要報告書である。
2. 今回の調査は、香川県観音寺市八幡町、有明町、高屋町、室本町、流岡町の一部を対象地区とした。また、重点調査地区として興昌寺山を対象とし興昌寺山1号古墳の範囲確認等の調査と全山の踏査を実施し遺跡の所在確認を行った。
3. 発掘調査、調査地区内の分布調査及び本書の執筆・編集は、観音寺市教育委員会事務局生涯学習課文化振興係 主査 久保田昇三が担当した。また、出土遺物の整理、実測、トレースの一部は一藁智代美が担当した。
4. 挿図の一部に観音寺市全図其の1(1/10,000)を使用した。図面の方位はすべて磁針方位で示した。また、実測図の縮尺はすべてスケールで表示した。なお、本文中の(1)おもな遺跡の概要の欄の位置図は1/10,000、調査地区内遺跡分布図(1)・(2)は1/10,000を縮小したものである。
5. 出土遺物は観音寺市郷土資料館で保管している。
図面・写真等は観音寺市教育委員会事務局で保管している。
6. 本事業の実施にあたっては、興昌寺代表役員米谷恵聰氏、発掘調査に携わった松本光男氏、坂田昇氏、西山秋久氏、牧野巧氏にご協力を頂いた。また、本書の作成にあたっては井元滝雄氏、片桐孝浩氏にご指導頂いた。記して謝意を表します。

目 次

グラビア・例言・目次

	頁
1. はじめに	1
2. 調査対象地区の概要（立地と環境）	1
3. 分布調査結果	2
(1) おもな遺跡の概要（位置図 1/10,000）	2
① なつめの木の貝塚	2
② 室本遺跡	3
③ 鹿隈罐子塚古墳	3
④ 前ノ原箱式石棺墓群	3
⑤ 丸山古墳	4
⑥ 池の宮古墳（1号墳、2号墳）	4
⑦ 高瀬古墳	4
⑧ 高屋廃寺	5
⑨ 九十九山城（江甫草山城）	5
⑩ 字東丸山古墳群（仮称）	5
⑪ 前ノ原七宝古墳（仮称）	6
⑫ 十王堂跡骨壺発見地	6
(2) その他	6
◆ 調査地区内遺跡分布図	7～8
◆ 調査地区内遺跡一覧表	9～10
4. 重点調査地区	11
(1) 興昌寺山周辺の概要と遺跡分布	11
◆ 興昌寺山周辺遺跡分布図（1/5,000）	11
① 興昌寺山2号古墳	11
② 興昌寺山1号古墳	12
◆ 興昌寺山1号古墳周辺地形測量図・トレンチ配置図	14
◆ 興昌寺山1号古墳石室実測図	15
◆ 土層図・トレンチ実測図	16
① トレンチ1	
② トレンチ2	
③ トレンチ3	
◆ 線刻画拓本（1）	17
◆ 線刻画拓本（2）	18
◆ 出土遺物実測図	19
5. 写真目次	20
6. 参考・引用文献	26

1. はじめに

本事業は、観音寺市内に所在する埋蔵文化財の位置、範囲及び性格等を把握するため詳細な分布調査を実施し、今後の文化財保護行政の基礎資料とするものである。

平成12年度においては、調査対象地域を観音寺市北部地域（財田川以北の市内部分一八幡町、有明町、高屋町、室本町、流岡町の一部）に設定し、基本的には踏査により現地確認を行い分布調査を実施した。

また、調査対象地区内に重点調査区域を設けた。重点調査区域は興昌寺山全域とし、踏査を中心に区域内の遺跡の確認を行った。なお、以前から遺跡の存在が確認されていた興昌寺山1号古墳については、遺跡の範囲、性格等が未詳であったため、今後の遺跡の保存を図るための資料を得るため地形測量、トレンチ調査を中心に発掘調査を行った。

2. 調査対象地区の概要（立地と環境）

今年度の調査対象地区は、古代の讃岐国刈田郡高屋郷と坂本郷の一部に比定される地域を中心とした地域で、現在の町名でいえば、観音寺市高屋町、室本町、八幡町、有明町と流岡町の一部を含む地域である。調査地区内を概ねその地形などから以下の地域に区分することができ、その概要を記する。

①標高約444mを頂上部とする七宝山とそれに付随する尾根部並びに丘陵部

標高約400mの稲積山の頂上平坦部に延喜式内社の高屋神社が鎮座する。この場所は全国遺跡地図香川県（文化庁文化財保護部 S52.3.25）に掲載されており高屋遺跡（祭祀跡）とされており詳細は不明であるが、式内社になっていることから何らかの遺跡の所在の可能性が考えられる。次に、字前ノ原の七宝山斜面部（標高100m付近）からは数基の箱式石棺墓が発見、調査されている。また、山麓の尾根部や丘陵部には鹿隈罐子塚古墳（前期）や丸山古墳（中期）などの遺跡が築造されている。さらに、海岸部には標高約153mの九十九山があり細川氏の居城といわれる九十九山城（江甫草山城）の城郭遺構が残されている。

②琴弾山及び興昌寺山周辺地域

琴弾山及び興昌寺山は両山とも標高約70m程度の山で、山全体が花崗岩で構成されている。琴弾山は山全体が名勝琴弾公園に含まれ、山の南東部の麓から頂上部にかけて琴弾八幡宮の敷地となっている。また、山の北東部には四国霊場八十八ヶ所第68番神恵院、第69番観音寺があり、重要文化財の観音寺金堂（建造物）が所在し、同じく重文の木造涅槃仏像、絹本着色琴弾八幡本地仏像などの文化財が所蔵されている。次に、興昌寺山には興昌寺があり、境内には俳諧の祖・山崎宗鑑の一夜庵（市指定）や仏足石（市指定）があり、また、山全体にミニ四国八十八ヶ所が設けられていて、山頂部には興昌寺山1号古墳（市指定）や山崎宗鑑墓などがある。

③有明浜を含む海浜部

財田川河口から北へ約2kmの九十九山までの間に有明浜が形成されている。有明浜は瀬戸内海の燧灘に面する自然の砂浜で、この浜には有明浜の海浜植物群落（市指定）があり西日本有数の海浜植物の群落となっている。また、有明浜の東側一帯はそのほとんどが砂地となっており、現在はビニールハウスが多く建てられ畑作地帯となっている。この地域の北端部つまり九十九山の麓近くには、かつて3条からなる砂丘が海岸線に平行してあったようである。その第2砂丘と呼ばれるところの北端部から弥生時

代前期の壺や鉢が出土し、現在、室本遺跡出土品として県指定文化財となって観音寺市郷土資料館で保管されている。

④その他の平野部

中央部には、二ノ坪、三ノ坪、四ノ坪、七ノ坪、八ノ坪などの字名が残ることやその付近の一辺約100m余りの方形区画の地割りにより、千鳥式と考えられる条里制が残存している。

3. 分布調査結果

分布調査にあたっての基本作業を次の2項目とした。

- ①現在まで確認されている遺跡の現地確認を行い位置等の再検証を行う。(周知の遺跡の再検証)
- ②文献等はあくまでも参考程度にし、踏査や聞き取り調査中心に調査を実施し、新しい遺跡の確認を行う。また、遺跡とは断定できないが、可能性のあるものや参考となる場所についても、記録する。

今回の調査結果を後段の調査地区内遺跡分布図と調査地区内遺跡等一覧表にまとめた。以下、図表の説明を加えておく。

◎調査地区内遺跡分布図

- ・この分布図は、字ごとに境界線を入れ、各字名を記入した。
- ・遺跡の位置は●で示した。
- ・遺跡の推定範囲は……で示した。

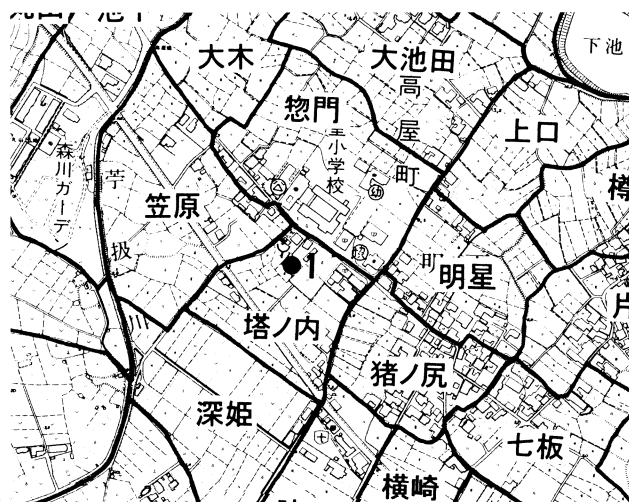
◎調査地区内遺跡一覧表

- ・表左欄の遺跡番号と分布図番号は対応している。

(1) おもな遺跡の概要

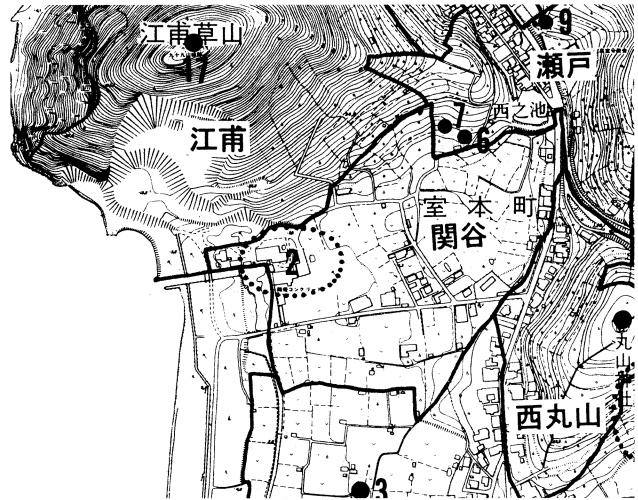
①なつめの木の貝塚【地図内番号1】

高屋町の高室公民館付近は、古くから貝塚の存在が知られていた。以前には、なつめの木の大き木がそびえていたので、現在の名称で呼ばれている。昭和34年の小規模な発掘調査や昭和55年に採集された土器は縄文時代前期のものである。平成4年の発掘調査では、縄文後期前半の土器が出土した。また、土器以外の遺物には石錘、石匙、石包丁、貝製釧、獣骨、魚骨、敲き石、貝層ブロック等がある。獣骨はイノシシ、シカが多く、貝類ではアサリなどの二枚貝が多い。土器は、縄文後期前半の中部瀬戸内地域の土器型式の空白部分を埋める資料となっている。



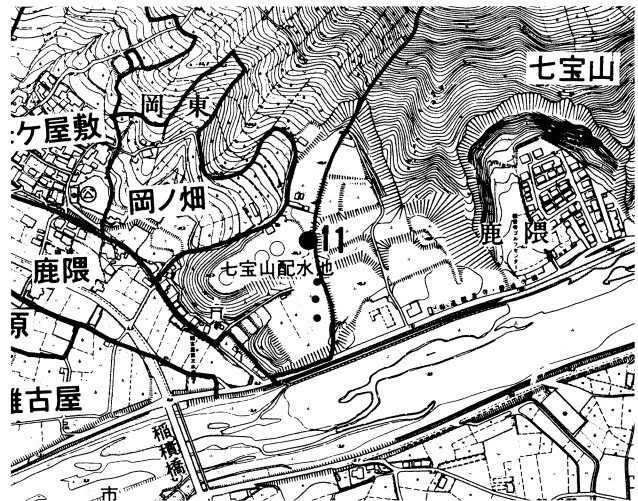
②室本遺跡【地図内番号2】

昭和30年頃までは、室本遺跡周辺は仁尾街道から海岸線（有明浜）にかけてほぼ平行に三条の砂丘が形成されていた。その第二砂丘（比高差約5m）の北端部から発見されたのが、県指定文化財に指定されている室本遺跡出土品である。砂丘の砂はガラスの原料に適していたため、砂が採掘され発見されたものであろうが、現在、その大部分は失われている。当時の研究者により遺跡の状況を記した図面等が残されているが、詳細な状況は判然とせず不明な点が多い。出土品は、観音寺市郷土資料館に収蔵、展示されている。



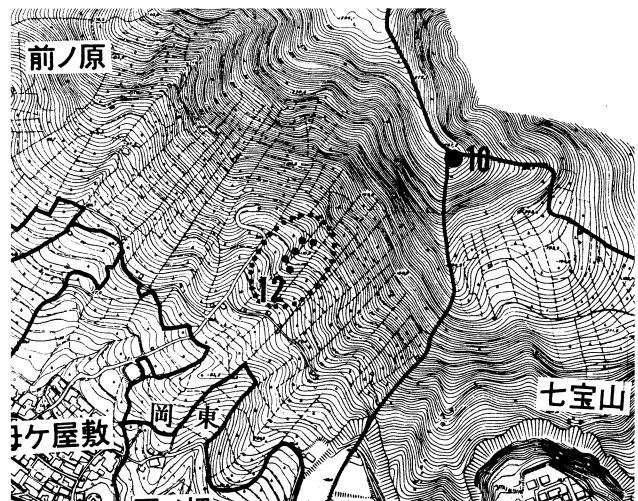
③鹿隈罐子塚古墳【地図内番号11】

昭和52年発掘調査が実施されている。墳丘の直径27.6m、高さ3.5m、墳頂平坦部径約10mの円墳である。埋葬施設は、第一主体部と第二主体部の二カ所ある。第一主体部は戦前に破壊され詳しい状況は不明であるが、付近より「王」の字が読み取れる銅鏡の細片が出土しており、第一主体部の副葬品であろうことが推測される。第二主体部は、墳丘中央部よりやや北よりにあり、長さ1.67m、幅0.3～0.4mの小規模な竪穴式石室であり、内部からは成人女性の頭骨、鉞、堅果類の炭化物が出土している。



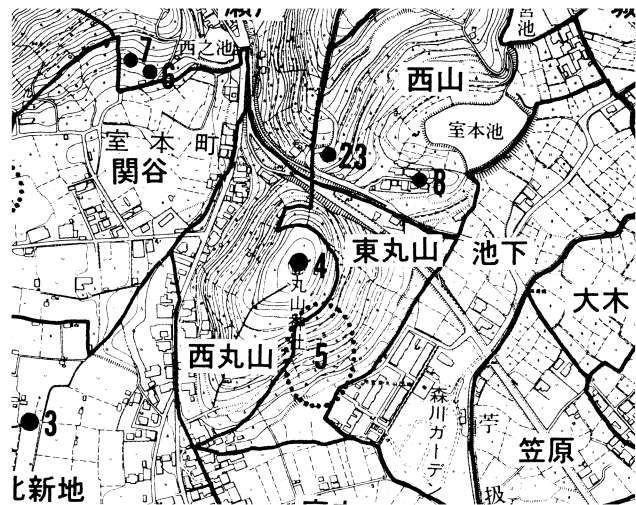
④前ノ原箱式石棺墓群【地図内番号12】

高屋町字前ノ原の七宝山の斜面（標高100m付近）で昭和26年～39年にかけて数基の箱式石棺が発見された。7号墓は、長さ約1.6m、幅約0.3～0.4m、深さ約0.26mである。石棺内には、身長約1.4mの成人女性が埋葬されており、人骨頭部の右側には内行花文鏡、碧玉製管玉、刀子などが副葬されていた。8号墓は、7号墓の近くに寄り添うように発見された。小型の石棺内からは、左上腕部に三枚の貝製（マツバ貝）腕輪を装着した身長約1.2mの少女のものと思われる人骨が出土している。



⑤丸山古墳【地図内番号4】

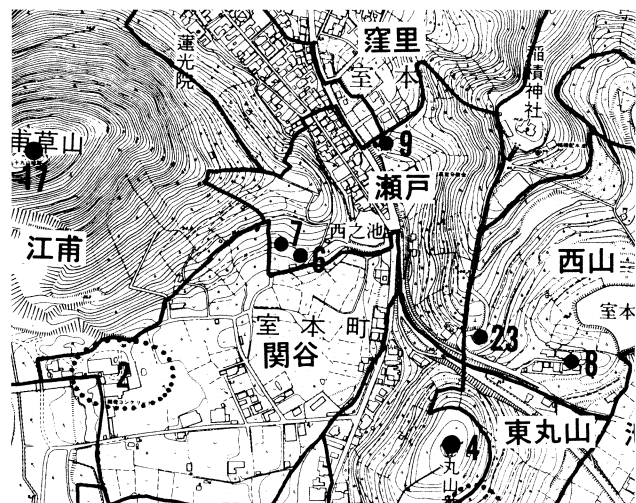
丸山神社の境内にあり、墳丘の半分が失われている。昭和22年、平成10、11年度に調査が行われている。直径約35mの円墳には、葺石が葺かれ円筒埴輪のほか馬形埴輪、偶蹄目の動物埴輪、蓋形埴輪などの形象埴輪が立て並べられていたことが確認された。また、特筆すべきは、石室規模が、長さ（現存長）約4m、幅（推定長）約3.7mの平面プランであることが判明し、埋納されている阿蘇溶結凝灰岩製刳拔式舟形石棺の配置や残存している周壁の構造から想定される天井部の構造や規模などから考えると、巨大な初期横穴式石室であることが推測される。5世紀中葉～後半。昭和45年3月12日市指定文化財（史跡）に指定。



⑥池の宮古墳（1号墳、2号墳）

【地図内番号6、7】

室本町の上条自治会館の裏手（北側）に所在する。直径10m程度の横穴式石室の円墳である。南側に開口する石室の天井石は奥壁側一石を残すほかは失われており、土砂が石室内に相当量流入している。また、羨道部入口付近は、破壊を受け崖状の地形となっている。さらに、西側約20m付近にはもう1基の横穴式石室を確認した。現状を観察すると、奥壁に近い部分は天井石が3石残存しており2m程度の空間があるが、その他は2石の天井石がずれ土砂が石室内に流入している状況である。なお、本書では以前から知られているものを1号墳、今回確認したものを2号墳としておく。



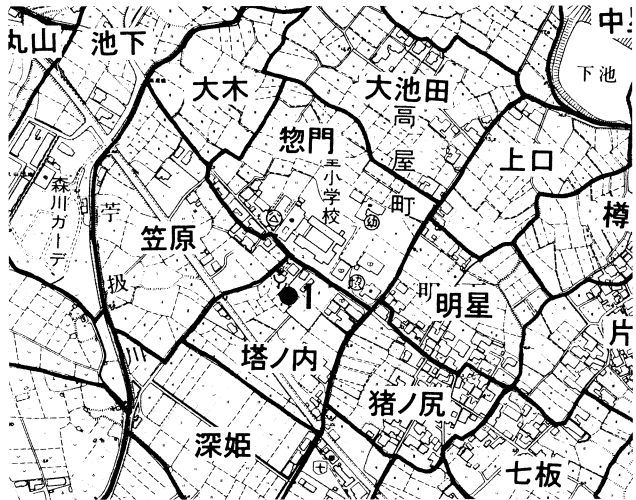
⑦高瀬古墳【地図内番号8】

昭和37年の調査カードによれば、石室高約3.2m、幅約2.3m、現存玄室長約3mの横穴式石室であることが確認できる。現在は破壊を受けているようで確認ができず残念である。時代は不明であるが現存していた当時の写真が1枚残されている。それによると、石室奥壁部分が取り除かれていて、写真は奥壁側（北側）から玄門（南方向）に向かって撮影されたことがわかる。玄門には両側に玄門立柱が石室内に突出する形で立てられ、その上にはマグサ石が乗せられている状況や少し胴張りしている平面プランであることが観察できる。出土品には平瓶が確認されている。



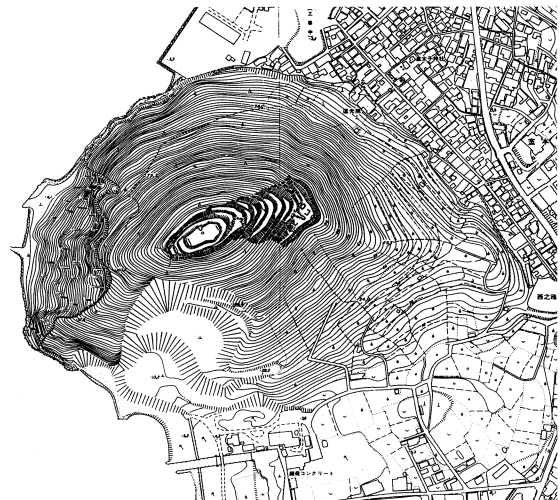
⑧高屋廃寺

塔ノ内、惣門などの字名が残されている現在の高室小学校、J A高室支所付近が寺域として考えられているが詳細は不明である。惣門の字内には寺家という地名も残されていることも参考となる。また、塔ノ内字内の田からはかつて建物の礎石になりうるような巨石が出土したことも伝えられている。鎌田共済会郷土博物館所蔵の十葉単弁蓮華文軒丸瓦には、「三豊郡高室村塔内瓦塚ニテ之ヲ採集ス」とあり瓦塚と呼ばれる場所もあったようである。なお、八葉素弁蓮華文軒丸瓦なども採集されており高句麗様式の影響がみられることが指摘され、白鳳期の製作が考えられている。



⑨九十九山城（江甫草山城）【地図内番号 17】

細川氏の居城で天正6年に落城したと伝えられる。城は、標高153.1mの頂上部に平坦面があり、この平坦面（約20m×40m）を主郭とすると、主郭の東北東端には土塁状の遺構があり、西南西端については幅4m程度の浅い堀切があり、それに土塁が端部に付属している。主郭を一段下ると主郭を取り巻くような帯郭が確認できる。帯郭の東・西部分は比較的広く幅約6～7mあるが、その他の部分については2～3m程度である。帯郭を西側に下ると堀切がありその西側に土塁が付属する。また、主郭から東方向の標高100m付近までの斜面には郭が16段（主郭も含む）ほど連続しているのが確認できる。



⑩字東丸山古墳群（仮称）【地図内番号 5】

現在では、その多くは開墾等により失われていて詳細なことは不明であるが、丸山古墳の南東方向（室本町字東丸山）の斜面部に何基か所在していたようである。現地には、所々に石室に使用されたと思われる石材が樹園地の石垣に転用された形で見受けられる。地元の方によれば、まだ破壊されていないものもあるようであるが、耕作放棄地となって樹木や草が繁茂しているため今回は確認できなかった。また、埋葬施設の種類も横穴式石室とは限らず、その内何基かは竪穴式や箱式であった可能性がある。



⑪前ノ原七宝古墳（仮称）【地図内番号 10】

遺跡は、七宝山から南東方向に尾根の頂上部を縦走すると、標高約 260m 付近で尾根の南端となる場所に位置する。ちょうどここは、字前ノ原と字七宝山及び豊中町との境界（古代の郡境）が交わる場所でもある。現在は樹木により視界が遮られているが、恐らく三豊平野の全域が見渡せる絶好のポイントではないだろうか。仮称で古墳としているが墳丘を持たない箱式石棺墓と推測される。蓋石と見られる幅約 80 cm の平らな石に接して長さ約 60 cm、厚さ約 10 cm の石材が垂直に立てられている状態である。



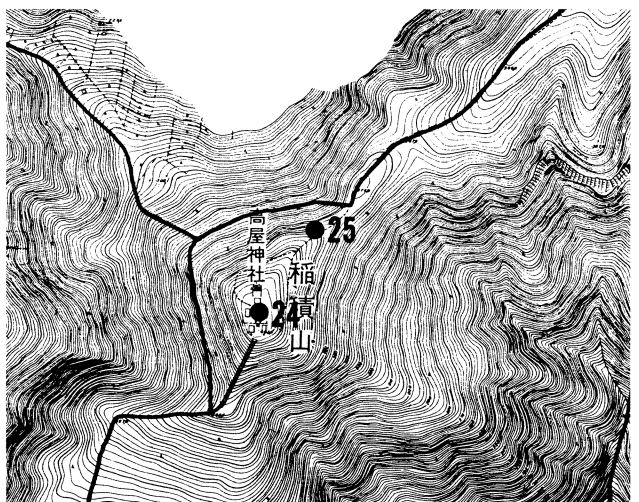
⑫十王堂跡骨壺発見地【地図内番号 18】

香川県文化財保護協会発行の史蹟名勝天然記念物調査報告によれば、琴弾神社境内十王堂跡から昭和 13 年に多数の五輪塔並びに骨壺 4 点と古銭十一文が発見されている。発見地は、神社の神幸殿の裏側で、神恵院観音寺開祖の日證上人が船中の宇佐明神と問答したと伝えられる問答石から少し東側に寄った辺りと思われる。出土品の中の第三号骨壺は、黒褐色の須恵質のもので、蓋の両面と壺の外面に梵字並びに銘文があり、中でも應安貳年（1369）己酉の銘は時代が特定できる。なお、これらのものは、当時の東京帝室博物館に収蔵されているようである。



(2) その他【地図内番号 25】

遺跡と断定はできないが、参考となるものに、標高約 400m の高屋神社から北東方向に尾根ぞいを少し下ると、安山岩の巨石群がある。この場所は尾根の頂上部を境に仁尾町と接する所で、眺望は特に北西方向に開け、瀬戸内海の燧灘や仁尾町の町並み、鳶島、紫雲出山なども見渡せる。さて、安山岩の巨石であるが、最大のもので高さ約 3 m あり、上面の平坦部の広さは約 9 m²程あるとみられる。他の巨石はこれほどではないが前述の巨石の周辺に散在する。これまで、この辺りから具体的な出土遺物は知られておらず、また、この巨石に固有の名称がつけられていないこともあるが、七宝山の各所で自然に安山岩の露出している状況とは様相を異にしていることにより遺跡としての可能性を今後考慮に入れておきたい。

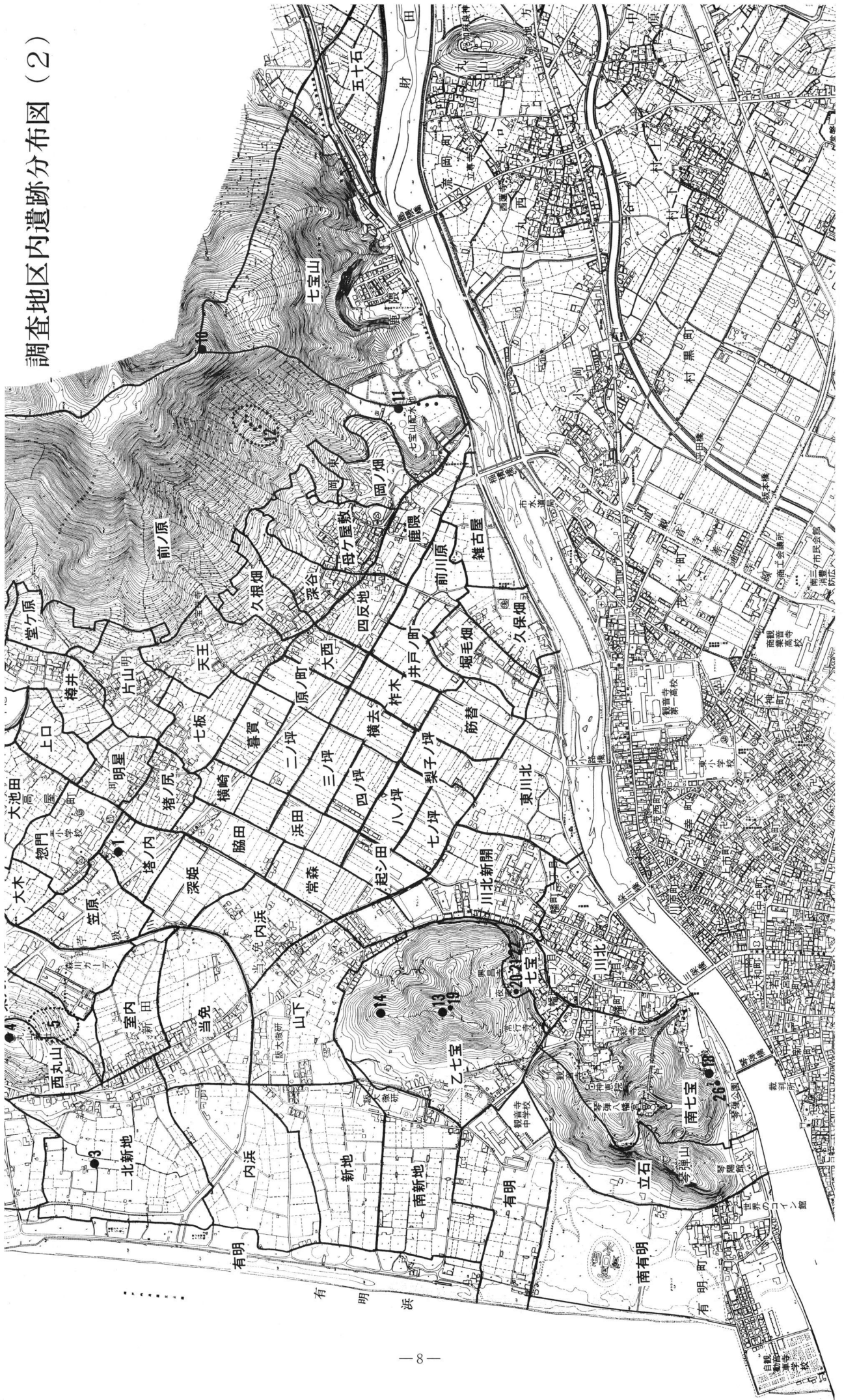


調査地区内遺跡分布図 (1)

仁尾町



調査地区内遺跡分布図 (2)



調査地区内遺跡一覧表

遺跡地図 No.	遺跡名	所在	種類	時代	時期	規模	特徴	出土遺物	遺物保管場所	調査年度	報告書	参考文献・資料
1	なつめの木の貝塚	高屋町字惣門885周辺	貝塚	縄文	前期 後期	不明	「なつめの木の式」といわれる縄文後期前半における中部瀬戸内地域の空白部分を埋める土器資料が出土。	縄文式土器 石鏃、石匙、石包丁 貝製鏃、敲き石 獸骨、貝層ブロック等	観音寺市郷土資料館	S34 H4	無	(財)香川県埋蔵文化財センター研究紀要Ⅱ 観音寺市誌 香川考古第2号
2	室本遺跡	室本町字関谷周辺	弥生	前期	不明	不明	有明浜に形成された砂丘中から発見。	木葉文壺 重弧文壺 螺旋重弧文壺 直線文壺 無文壺 浅鉢 等	観音寺市郷土資料館	無	無	観音寺市誌 香川考古第6号
3	九十九山南側砂丘遺跡	室本町字北新地585,586	縄文	晩期 弥生 前期 ↓ 後期	不明	不明	有明浜に形成された砂丘中から発見。 箱式石棺有り。	縄文式土器 弥生式土器 等	不明	S36	無	観音寺市誌 石川巖遺稿集
4	丸山古墳	室本町字西丸山691	古墳	古墳	中期	直径35mの円墳 石室規模 ・石室長約4m (現存長) ・石室幅約3.7m (推定長)	埋葬施設 初期竪穴式石室(推定) 舟形石棺1 (阿蘇溶結凝灰岩・割抜式) ※5世紀中葉～後半	鉄剣、鉄刀 馬形埴輪 鳥形埴輪 鳥形動物埴輪 鳥形埴輪(推定) 円筒埴輪 朝顔形埴輪 キヌガサ形埴輪 家形埴輪 冢形破片、鉄鍬 土師器 等	観音寺市郷土資料館 観音寺第一高校	S22 H10 H11	1999 2000	観音寺市誌 香川叢書 観音寺市内遺跡発掘調査概要報告書丸山古墳Ⅱ 観音寺市内遺跡発掘調査概要報告書丸山古墳Ⅱ
5	字東丸山古墳群 (仮称)	室本町字東丸山	古墳	古墳	不明	不明	開鑿により破壊?	無		未調査		
6	池の宮1号古墳	室本町字瀬戸	古墳	古墳	後期	直径10mの円墳	竪穴式石室	無		未調査		観音寺市誌
7	池の宮2号古墳	室本町字瀬戸	古墳	古墳	後期	不明	竪穴式石室	無		未調査		
8	高瀬(の)古墳	室本町字西山	古墳	古墳	後期	直径14mの円墳	竪穴式石室(破壊?)	平版	不明	未調査		観音寺市誌
9	七宝古墳	室本町字瀬戸	古墳	古墳	不明	不明	不明(破壊?)	無		未調査		
10	前ノ原七宝古墳 (仮称)	高屋町字前ノ原		不明	不明	不明	箱式石棺? 標高約260mに立地。	無		未調査		
11	鹿蹊縄子塚古墳	高屋町字前ノ原	古墳	古墳	前期	直径27.6m円墳	第一主体部 竪穴式石室 (詳細不明) 第二主体部 竪穴式石室 (移築復元)	「王」字銘文 銅鏡細片 銅、短冊状鉄斧 堅果類炭化物 人骨 等	観音寺市郷土資料館	S52	無	観音寺市誌 鹿蹊カンス塚(現地説明会資料)
12	岡東箱式石棺墓群	高屋町字前ノ原					1号 不明 2号 不明 3号 不明 4号 箱式石棺 5号 箱式石棺 6号 不明 7号 箱式石棺 8号 箱式石棺	不明 不明 不明 遺物無 人骨、土枕 不明 人骨、刀子 仿製内行花文鏡 碧玉製管玉 等 人骨、貝製腕輪	観音寺市郷土資料館	S26 ~S39	無	観音寺市誌

13	興昌寺山1号古墳	八幡町字乙七宝 (興昌寺山山頂部)	古墳	古墳	後期	南北長 約30mの墳丘 石室規模 ・石室長約7.8m ・玄室長約4.3m ・奥壁幅約1.9m ・石室高約2.1m	横六式石室 ・腰石を採用 ・平天井 ・阿袖式 線刻画(葉、船など)	須臾器 土師器 (16世紀)	観音寺市郷土資料館	H12	2001	観音寺市誌
14	興昌寺山2号古墳	八幡町字乙七宝	古墳	古墳	不明	直径15mの円墳	不明	須臾器片	不明	未調査		
15	高屋庵寺 (個所に示す)	高屋町字惣門 字塔ノ内 周辺	寺跡	白鳳	不明	不明		瓦	(財)鎌田共済会 郷土博物館	未調査		
16	糸里制跡 (個所に示す)	高屋町字二ノ坪、三ノ坪 四ノ坪、七ノ坪、八ノ坪 脇田、常森、横崎、幕賀 原ノ町、大西、梨子ノ坪 横去、杵木、筋替、浜田 起シ田 周辺地域	糸里	奈良			千鳥式 (二条十二里)	無		未調査		香川県史1 原始・古代 観音寺市誌 香川県三豊郡史
17	九十九山城 (江甫草山城)	室本町字江甫	山城	鎌倉 ↓ 戦国		標高153mの山 の頂上部周辺と 北東側の尾根筋 に遺構が残る。	細川氏居城 天正6年落城? 郡、土塁、堀切、石垣	無		未調査		観音寺市誌
18	十王堂跡骨壺発見地 (十王堂経塚)	八幡町字南七宝	墓	室町	不明	不明	3号骨壺に徳安武年の銘あり	骨壺4、五輪塔、古銭	東京国立博物館	S13	無	史蹟名勝天然記念物調査報告(下巻)
参考19	山崎宗鑑墓	八幡町字乙七宝	墓	室町		3基の五輪塔		無		未調査		観音寺市誌
参考20	一夜庵	八幡町字七宝	庵	室町				無		未調査		
参考21	宗鑑法師之塔	八幡町字七宝						無		未調査		
参考22	細川氏政供養塔	八幡町字七宝						無		未調査		
参考23	忠魂碑古墳跡	室本町字西山	古墳	古墳	不明	不明	不明	無		未調査		
参考24	高屋遺跡	高屋町字稲岳山			不明	不明	不明(祭祀遺跡?)	無		未調査		
参考25	高屋神社北東部巨石群	高屋町字稲岳山						無		未調査		
参考26	問答石	八幡町字南七宝						無		未調査		
位置不明	岡谷古墳	室本町字岡谷	古墳	古墳	不明	不明	不明	不明	不明	S36?	無	
位置不明	室本砂丘の横六式石室	室本町	古墳	古墳	不明	不明	横六式石室(石室長3m前 後?)	不明	不明	年代不明	無	観音寺市誌
位置不明	有明遺跡	室本町(坂大蔵研付近)	不明	不明	不明	不明		師築式土器	不明	未調査		

4. 重点調査地区

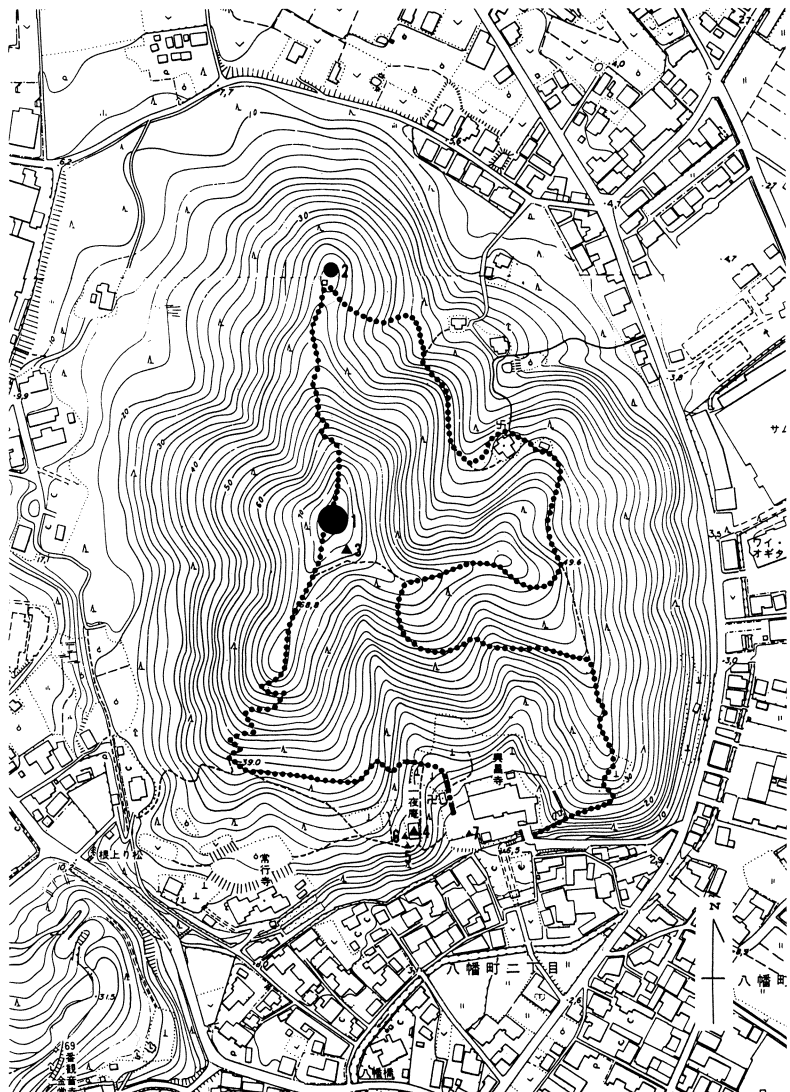
(1) 興昌寺山周辺の概要と遺跡分布

山全体が花崗岩で構成され、頂上は標高約75mで興昌寺山1号古墳が所在する。山の裾部、特に山の北、西側は砂地となっており、それが海岸線（有明浜）まで約500m続いている。また、この地域は瀬戸内海国立公園特別地域、保安林及び風致地区となっており、主に松が山全体に繁茂しており季節を通して緑豊かな場所となっている。山の南側には、臨済宗東福寺派の興昌寺があり、境内には俳諧の祖・山崎宗鑑ゆかりの一夜庵や仏足石がある。さらに、山全体を巡るようにミニ四国八十八ヶ所などが設けられ巡拝の人が絶えない。

さて、重点調査地区の遺跡分布調査であるが、全山の踏査を行ったが新知見の遺跡と見られるものは確認できなかった。頂上から南に伸びる尾根の南端部については、当初、遺跡であると思われたが花崗岩の岩盤が露出しており可能性は無くなった。また、東に伸びる尾根についても確認できなかった。その他、多くの斜面は急傾斜となっていて同様であるが、まったく遺跡の存在を否定するのも早計であるので、今後注視していきたい。よって、以下については、興昌寺山1号、2号古墳を中心に記することにする。

①興昌寺山2号古墳

1の興昌寺山1号古墳については、後段に記することにして、2号古墳については、これまで須恵器片が付近から採集されたり、その地形や立地などからその存在は知られていた。1号古墳の所在する場所が山の頂上部で、そこから北方向に伸びる尾根



興昌寺山周辺遺跡分布図 (1:5,000)

- 1. 興昌寺山1号古墳 (市指定文化財 史跡)
- 2. 興昌寺山2号古墳
- ▲ 3. 山崎宗鑑墓
- ▲ 4. 一夜庵 (市指定文化財 史跡)
- ▲ 5. 細川伊予守氏政供養塔
- ▲ 6. 宗鑑法師之塔
- ▲ 7. 仏足石 (市指定文化財 民俗)
-ミニ四国八十八ヶ所順路

の先端部の標高約 44m の所に位置する。1 号古墳から水平距離で約 150m あり、樹木がなければ、丸山古墳や七宝山が正面に望める場所でもある。直径約 15m の円墳であると思われる墳丘の中心部は石室が崩壊あるいは破壊を受けているのか定かではないが少し窪んだ状態である。また、墳丘の南側の辺りには墳丘と尾根とを区分するような浅い溝状の地形が見られる。墳丘の周囲に目をやると、墳丘からなだらかに自然地形になるのではなく、すこしフラットな地形が周囲に存在する。埋葬施設は、仮に横穴式石室であれば北方向に開口すると考えられる。

②興昌寺山 1 号古墳

◎周辺地形（地形測量）について

興昌寺山 1 号古墳は、興昌寺山の頂上部の標高約 75m に位置する。地形測量の結果、これまで円墳といわれてきたがそれとは大きく異なる地形であることが判明した。石室を一部破壊するなどの後世の地形変更がどの程度及んでいるか不明であるが、現状の地形を見る限り円墳とは言い難い。それではどのような墳形と言えよいのであろうか。あえて言及するなら墳丘中心部については前方後円形を思わせる形態で、南側の後円部分が大きく、北側に撥状に開く前方部がつくような形である。そして、撥状地形の先端の両角から東西両サイドに土塁状の地形が墳丘を大きく取り巻くように伸びる地形、これが前方後円形にみえる視覚的原因のように考えられる。また、八十八ヶ所巡礼のための歩道のため破壊されている部分を考慮に入れると、東西両サイドから伸びた土塁状地形は南側で連結して、環状の土塁状地形を形成していたことが想定される。さらに、前述の歩道により破壊されている部分を観察すると、人工的な石積列があり自然地形でないことがわかる。詳細は、後段のトレンチ調査の項に記す。なお、この土塁状地形は、石室主軸を中心とすると東西の土塁状地形までの距離は等しくない。東側の方が約 6 m 長い不均等なものであることも付け加えておく。

◎トレンチ調査について

遺跡の範囲や墳形等を確認するためトレンチを 3 箇所設定した。なお、当地域にかかる法律等の規制により樹木の伐採が不可能なためトレンチの設定に影響があったことを理解して頂き、以下、その内容を記す。

・トレンチ 1

墳丘の東側に設定した。土塁状地形の一部も範囲に含めて土層等の確認を行った。地表から約 60 cm のところで地山の花崗土となった。地山の直上から人頭大の石が確認され同時に須恵器や土師器片が出土した。どれも破片ばかりで接合できるものは僅かであった。また、土塁状地形の部分は盛土を行っており、地山自体も周囲が削られているのか、一旦外（東）に向かって緩やかに下る地形が土塁状地形の部分では逆に盛り上がる形となっている。

・トレンチ 2

墳丘の西側に設定した。トレンチ 1（T1）同様地山のラインは西方向に行くにつれ一旦下るが、ある地点から逆に盛り上がりを見せ、再び下っていく。その比高差は約 40 cm あり T1 と同じような状況がみられる。さらに、その上には盛土がされ版築のように堅固な土層となっている。なお、土塁状地形から石室側は砂質を多く含んだものとなっており、非常に軟質な土層を形成している。

・トレンチ 3

墳丘の南側に設定した。地山のラインは緩やかに南に下る。トレンチの範囲内では顕著なものは検出されなかった。須恵器片が 4 点出土している。

◎埋葬施設について

埋葬施設は横穴式石室である。天井部は 3 石の天井石が残されるほかは破壊を受け失われている。石室の石材は主に花崗岩と安山岩を使用し構築されている。花崗岩は主に玄室の基底部に置かれ腰石とし

て用いられている。また、天井石として1石であるが奥壁の上部に確認できる。石室の内部には相当量の土砂が流入していることや弘法大師の石像などが設置されていて床面の確認は困難な状況であった。天井部は平天井であるが奥壁側のものは少しレベルが低く斜めになっている。側壁は花崗岩の腰石の上に安山岩の石材が持ち送りされ構築されている。石室の平面形は、その石室幅が奥壁のところ約1.9m、中央部で約2m、玄門付近で約1.7mを測り少し中央部が脹らんだ形態をとっている。次に玄門部については、両側の袖石が石室内部に突出する（東約40cm、西約30cm）構造である。両袖石間の距離は約90cmで框石が置かれている。東側の袖石は柱状の花崗岩、西側のものは安山岩であり両方とも上部は破損を受けている。羨道の幅は玄室幅に比してしだいに狭くなる傾向を見せており、玄門付近で約160cm、中央部で約145cm、羨門のところ約140cmとなり最小となる。ここで石室に関する計測値をまとめておく。石室全長約7.8m、玄室長約4.35m、玄室奥壁幅約1.9m、玄室最大幅約2.0m、玄室高約2.1m（推定）。

◎線刻画について

本古墳の石室には、線刻画が描かれている。確認できるのは、安山岩のみで玄室の両側壁と天井石の一部である。石室が以前から開口していたこともあり、明らかに後世の落書きや模刻等と判断できるものがあるが、中には県内の事例に共通したモチーフもあり築造当初からのものと推定できるものもある。その代表的なものに葉と船とみられるものがある。

葉は西側の側壁にあり、比較的細い線で描かれている。葉柄から葉の先端までの長さ24.5cm、葉の最大幅12.7cmで葉柄部を上にし先端部を下に向けた形である。中央脈の左は葉脈が4本、右が5本あり、それぞれ斜め下方に伸びて描かれ葉縁まで達している。また、葉の右隣に未完成の葉と思われるものがある。それは、前述のものより幾分大きく描こうとしていたのか長さ30.5cmの中央脈と右側半分の葉縁のみである。葉脈は書かれていないので上下の判別はできない。

次に、東側の側壁にある船は、前後の区別は困難であるが、船の胴体を表現していると考えられる2条の線が左右両端にいくにつれしだいに斜め上方に描かれている。また、2条の線を通りほぼ垂直に伸びるマストを連想させる縦線が数本描かれている。

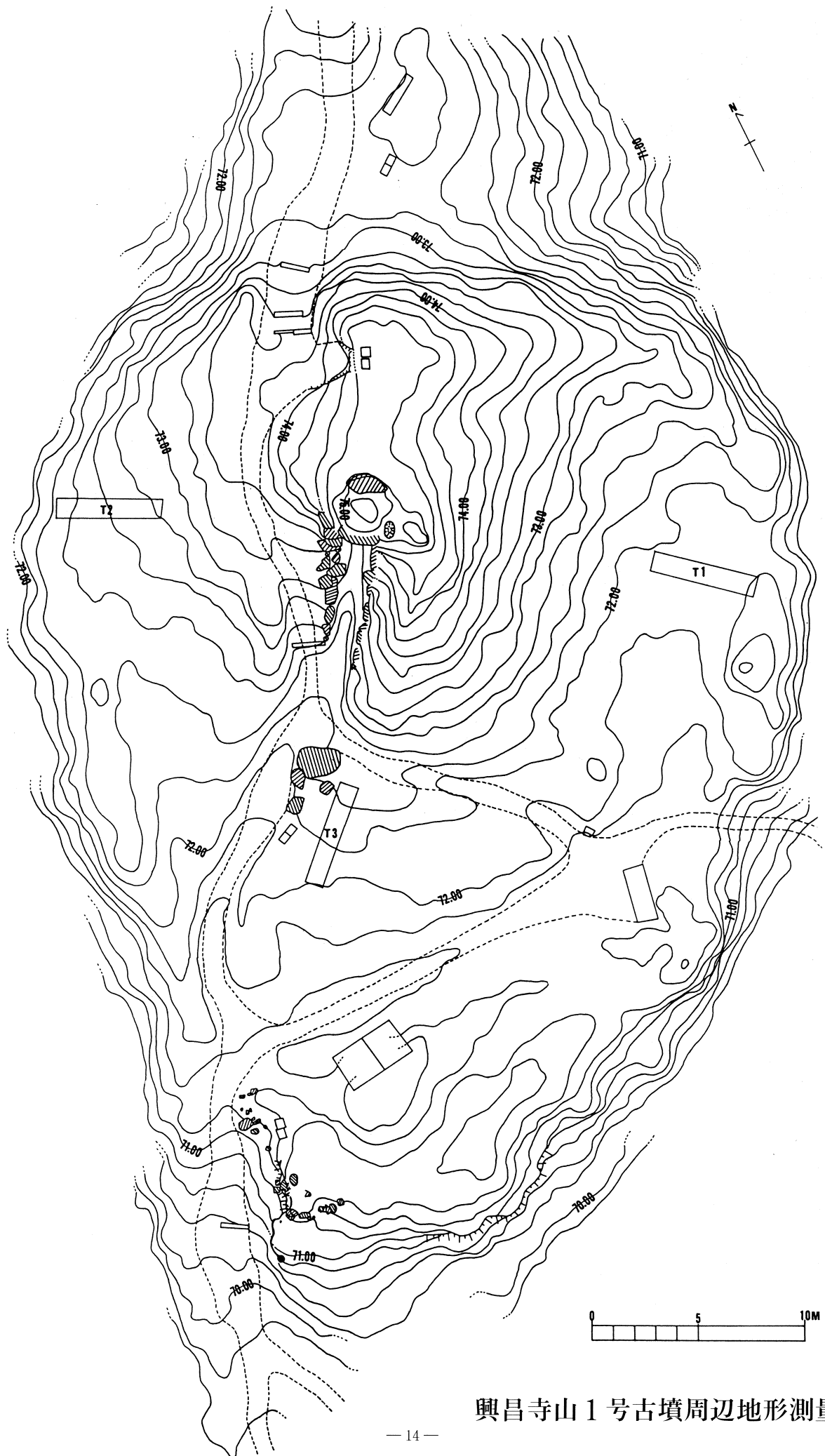
その他、繊細な線で描かれた線刻なのであるが意味不明なものが多い。また、「八」形のモチーフが各所に見られ、ある場所では連続して描かれているところもあるが、前述の葉や船の線刻と比べると線が荒く丁寧さに欠けており判断に困難なものもある。

◎出土遺物について

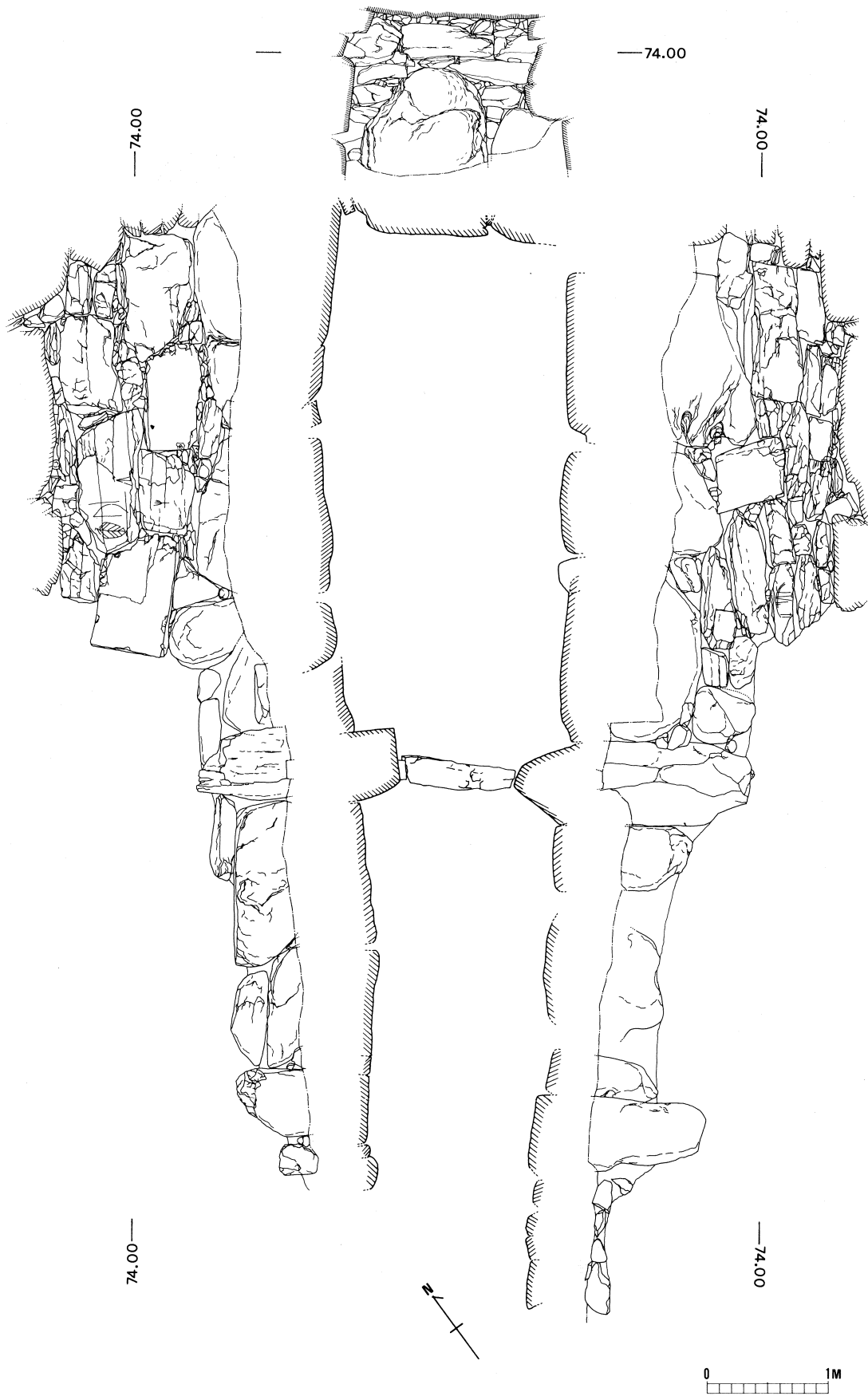
後段に出土遺物のおもなものを掲載した。出土点数は須恵器片や土師器片でコンテナ1箱程度であった。番号1～5は須恵器である。番号6～13は土師器である。番号1は杯身であり7世紀前半のものと推定される。番号8、9は羽釜であり、番号11、13はすり鉢である。土師器についてはその多くが16世紀のものとみられ、その他少量ではあるが17世紀代のものも出土している。

◎まとめ

今回の調査では、おもに地形測量と3箇所のトレンチ調査を行った。調査前まではいわゆる一般的な円墳であると理解されていたものが、調査の結果、その認識を再検討する必要性が生じた。それは墳丘と一体化している土塁状地形の存在による。これをどのように理解するかにかかっていることはいうまでもない。はたして、土塁状地形が古墳に付属する施設であるか、後世の別な目的の施設であるかは、現時点で得られた資料のみでは判断しがたく、他の類似例の検証や今後の再度の調査の機会を待ちたい。ただ、16世紀代の土師器の出土状況からみて、現在の地形は想像以上の改変が行われていることを考慮しなければならない。いずれにしろ、今後の遺跡の範囲については土塁状地形を含んだ範囲（南北約55m×東西約45m）を考えておかなければならない。



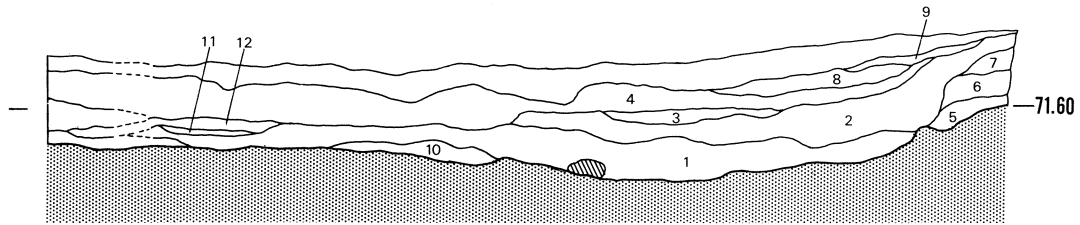
興昌寺山1号古墳周辺地形測量図



興昌寺山1号古墳石室実測図

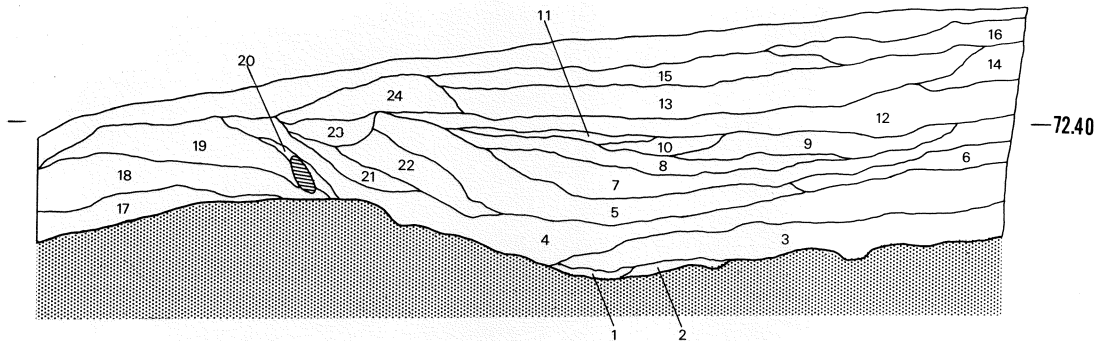
土層図・トレンチ実測図

① トレンチ 1



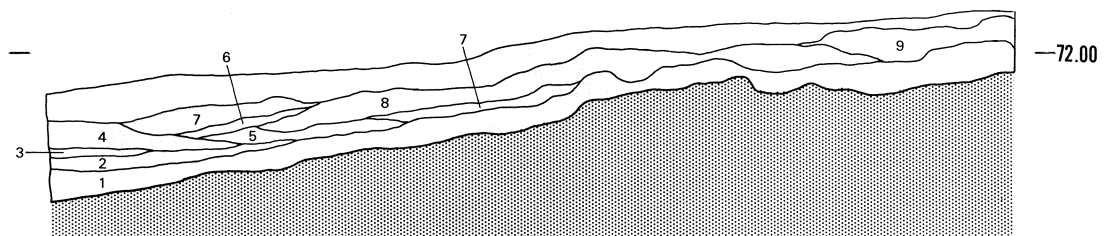
- | | | | |
|-------------|-------------|------------|-------------|
| 1. 黄茶褐色粘質土 | 2. 暗茶褐色粘質土 | 3. 茶褐色粘質土 | 4. 黄茶褐色粘質土 |
| 5. 暗黄茶褐色粘質土 | 6. 茶褐色粘質土 | 7. 暗茶褐色粘質土 | 8. 暗黄灰色粘質土 |
| 9. 黒灰色粘質土 | 10. 暗灰褐色粘質土 | 11. 黄褐色粘質土 | 12. 黄灰褐色粘質土 |

② トレンチ 2

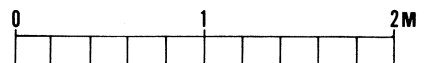


- | | | | |
|--------------|--------------|-------------|--------------|
| 1. 灰茶褐色粘土 | 2. 茶褐色砂質土 | 3. 黄茶褐色砂質土 | 4. 灰褐色粘質土 |
| 5. 黄灰褐色粘質土 | 6. 黄褐色砂質土 | 7. 明灰褐色粘質土 | 8. 暗黄褐色砂質土 |
| 9. 黄褐色砂質土 | 10. 黄灰褐色砂質土 | 11. 黄褐色砂質土 | 12. 黄茶褐色砂質土 |
| 13. 明黄茶褐色砂質土 | 14. 明黄茶褐色砂質土 | 15. 暗灰茶褐色質土 | 16. 暗黄茶褐色粘質土 |
| 17. 黄灰褐色砂質土 | 18. 暗黄茶褐色粘質土 | 19. 暗茶褐色粘質土 | 20. 黄褐色粘質土 |
| 21. 黄灰褐色粘質土 | 22. 黄褐色粘質土 | 23. 暗灰褐色粘質土 | 24. 黄褐色粘質土 |

③ トレンチ 3

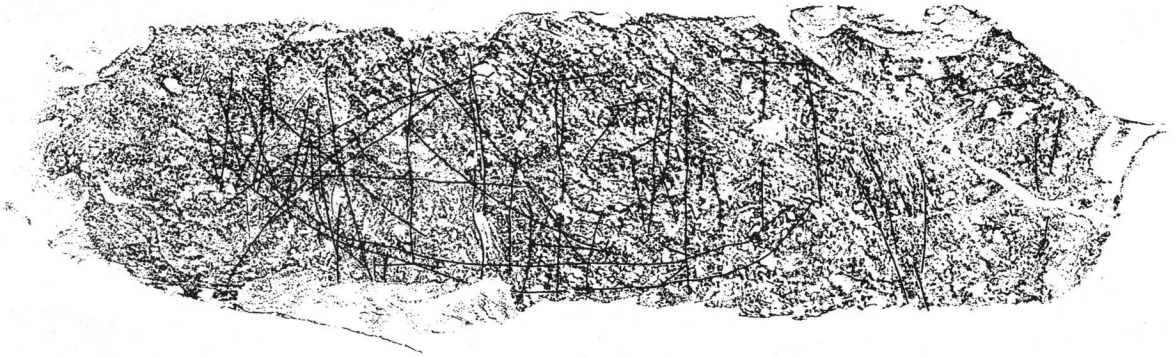


- | | | |
|-------------------|-----------------|------------|
| 1. 暗黄茶褐色粘質土 (砂質混) | 2. 黄褐色粘質土 (砂質混) | 3. 暗茶褐色砂質土 |
| 4. 黄茶褐色砂質土 | 5. 黄褐色砂質土 | 6. 黄茶褐色粘質土 |
| 7. 暗茶褐色粘質土 (砂質混) | 8. 暗黄灰褐色砂質土 | 9. 暗灰褐色砂質土 |

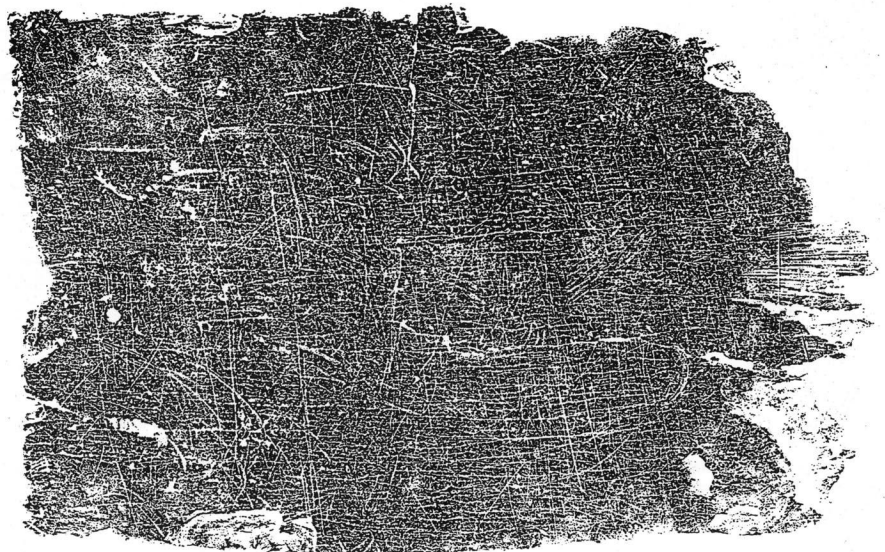


線刻画拓本（1）【線刻のおもなものを黒実線で示した。】

線刻画①（1／4）



線刻画②（1／8）

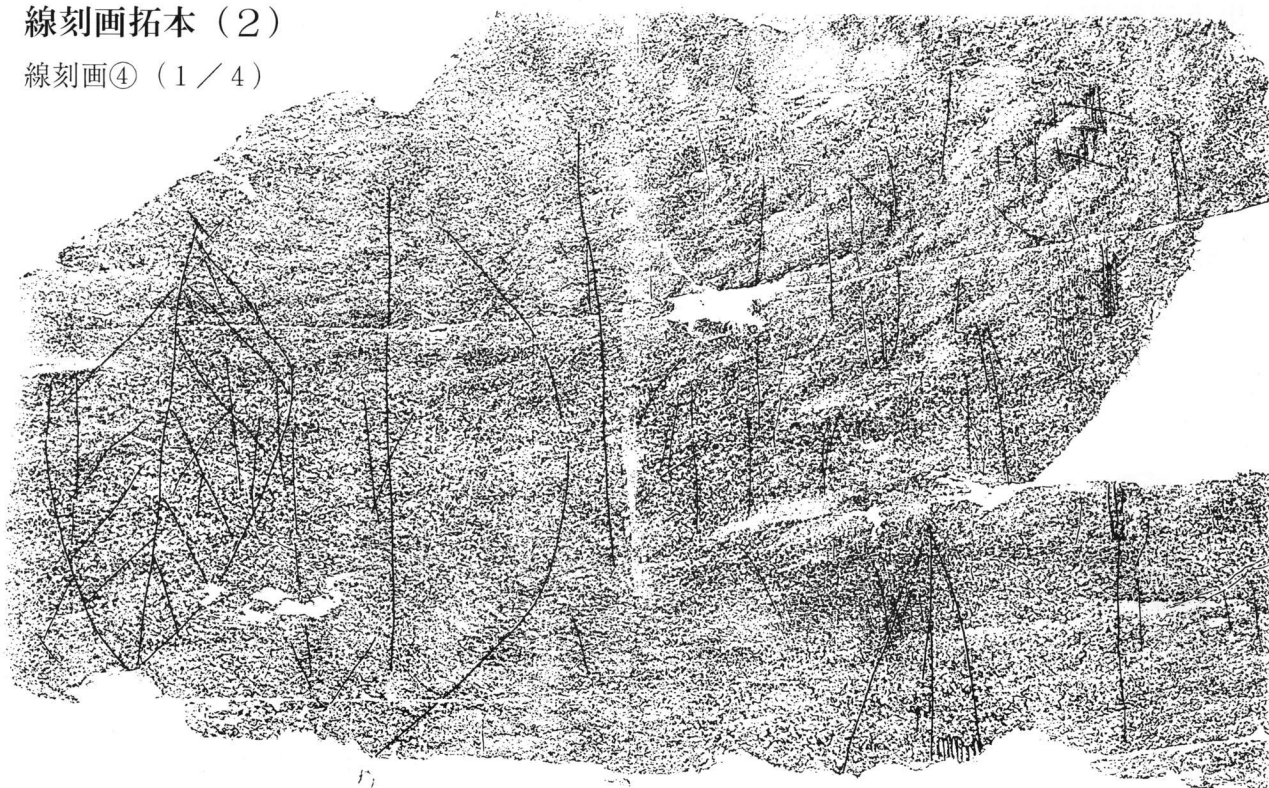


線刻画③（1／4）

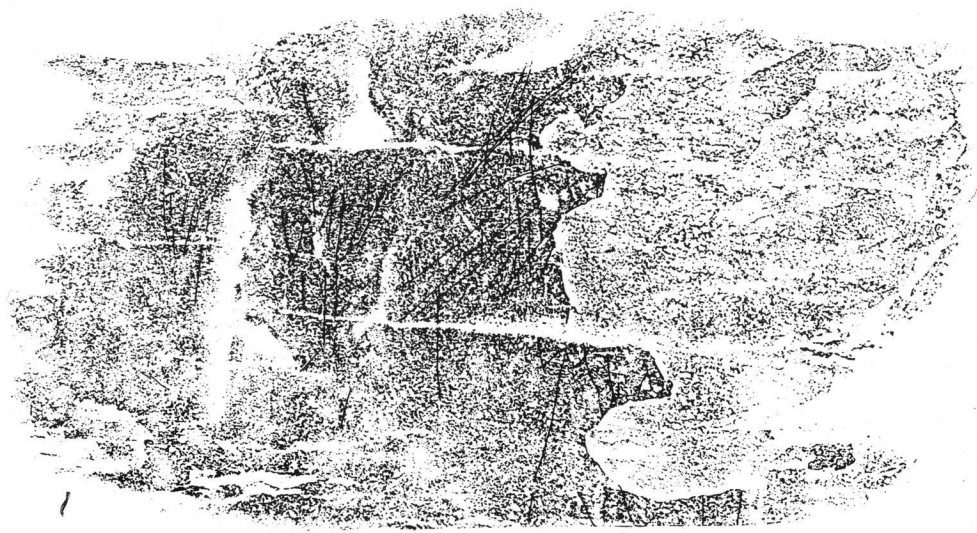


線刻画拓本 (2)

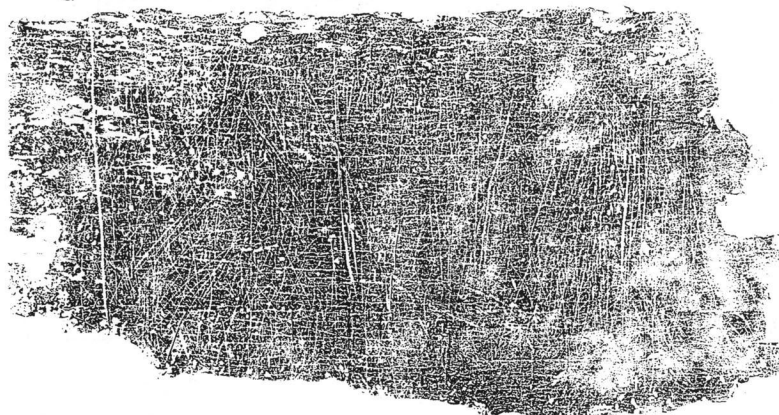
線刻画④ (1/4)



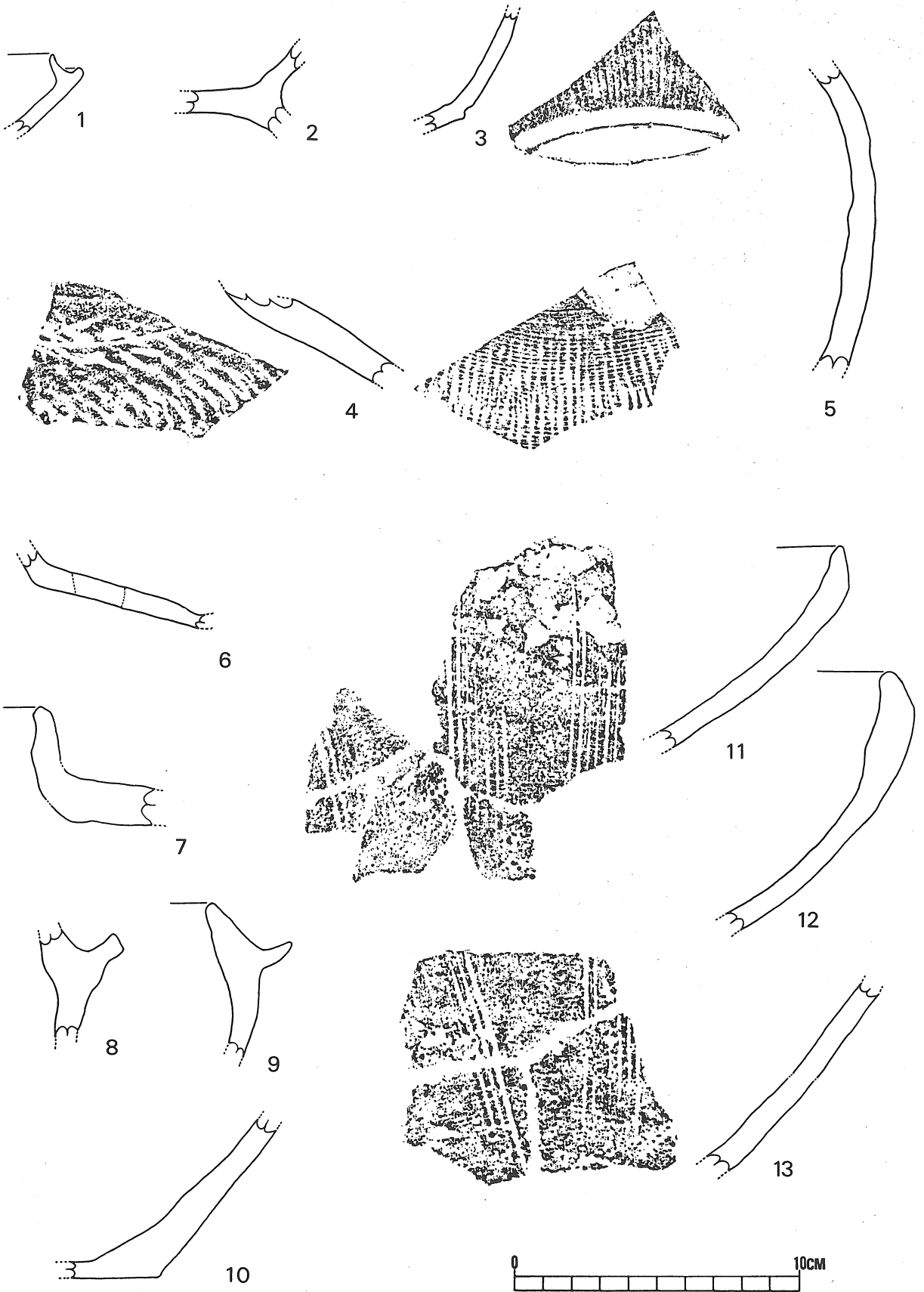
線刻画⑤ (1/5)



線刻画⑥ (1/8)

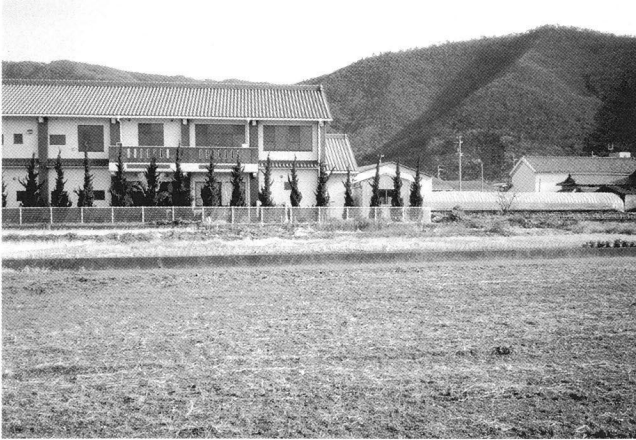


出土遺物実測図



写真目次

	頁
1. なつめの木の貝塚（現在）【地図番号 1】	21
2. 室本遺跡（現在）【地図番号 2】	
3. 鹿隈籬子塚古墳遠景（S52）【地図番号 11】	
4. 鹿隈籬子塚古墳の石室（S52）	
5. 前ノ原箱式石棺墓群 7号（S39年頃）【地図番号 12】	
6. 内行花文鏡（前ノ原 7号箱式石棺墓出土）	
7. 丸山古墳 石室と石棺（H10）【地図番号 4】	22
8. 丸山古墳 石室（北・東壁）の状況（H11）	
9. 池の宮 1号古墳（現在）【地図番号 6】	
10. 池の宮 2号古墳（現在）【地図番号 7】	
11. 池の宮 2号古墳の石室内部（現在）	
12. 九十九山城遠景（現在）【地図番号 17】	
13. 前ノ原七宝古墳（仮称）（現在）【地図番号 10】	23
14. 高瀬（の）古墳（撮影時期不明）【地図番号 8】	
15. 問答石（現在）【地図番号 26】	
16. 山崎宗鑑墓（現在）【地図番号 19】	
17. 興昌寺山 1号古墳全景【地図番号 13】	
18. 〃 石室	
19. 〃 トレンチ 1	24
20. 〃 トレンチ 2	
21. 〃 トレンチ 3	
22. 〃 線刻画（船）	
23. 〃 線刻画（葉）	
24. 〃 線刻画（不明）	
25. 〃 石室玄門付近	25
26. 〃 石室奥壁	
27. 〃 石室天井部	
28. 〃 墳丘南側の土塁状地形と石積の状況	
29. 興昌寺山 2号古墳（現在）【地図番号 14】	
30. 高屋神社北東部巨石群（現在）【地図番号 25】	



1. なつめの木の貝塚（現在）
【地図番号1】



2. 室本遺跡（現在）
【地図番号2】



3. 鹿隈罐子塚古墳遠景（S52）
【地図番号11】



4. 鹿隈罐子塚古墳の石室（S52）



5. 前ノ原箱式石棺墓群 7号墓（S39頃）
【地図番号12】



6. 内行花文鏡(前ノ原7号箱式石棺墓出土)



7. 丸山古墳 石室と石棺 (H10)
【地図番号 4】



8. 丸山古墳 石室(北・東壁)の状況 (H11)



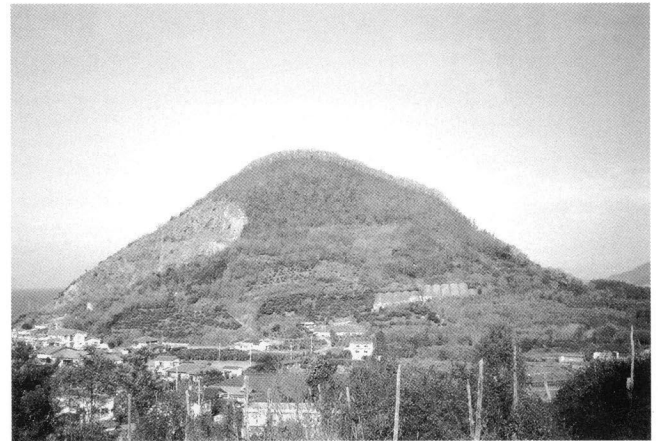
9. 池の宮 1号古墳 (現在)
【地図番号 6】



10. 池の宮 2号古墳 (現在)
【地図番号 7】



11. 池の宮 2号古墳の石室内部 (現在)



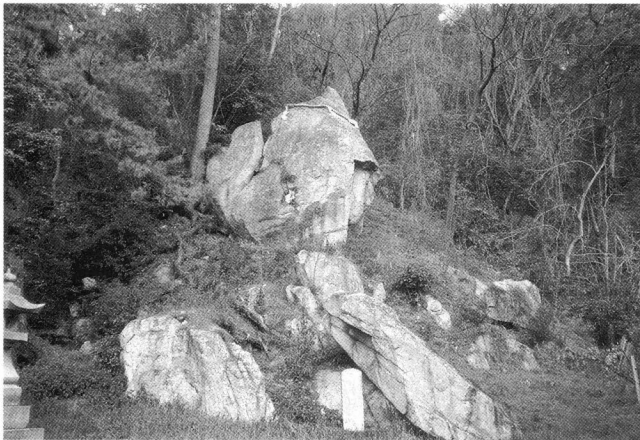
12. 九十九山城遠景 (現在)
【地図番号 17】



13. 前ノ原七宝古墳(仮称) (現在)
【地図番号10】



14. 高瀬(の)古墳 (撮影時期不明)
【地図番号8】



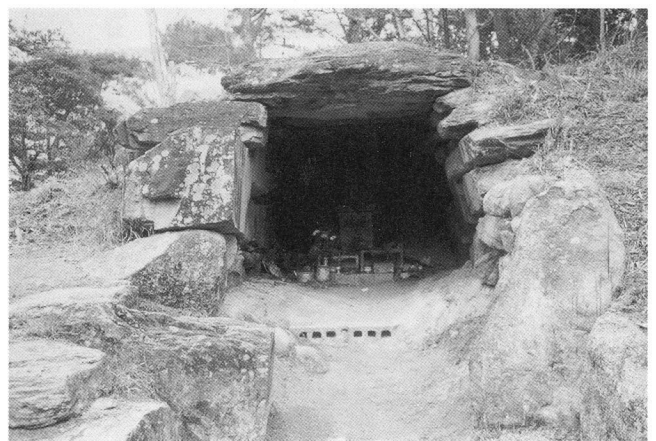
15. 問答石 (現在)
【地図番号26】



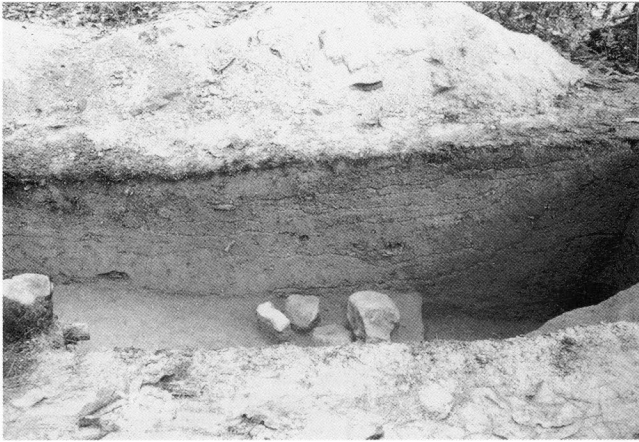
16. 山崎宗鑑墓 (現在)
【地図番号19】



17. 興昌寺山 1号古墳全景
【地図番号13】



18. 興昌寺山 1号古墳石室



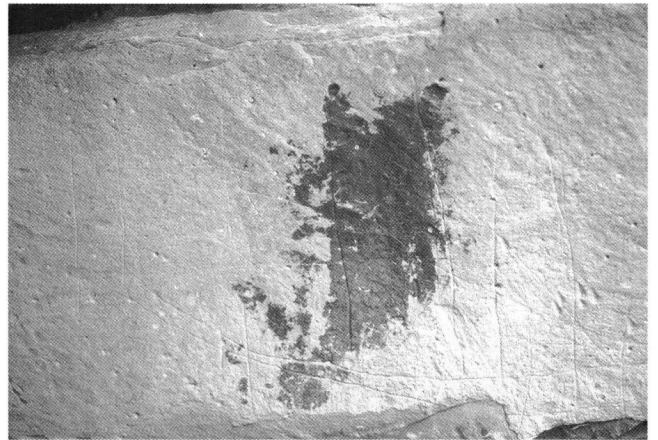
19. 興昌寺山 1号古墳 トレンチ1



20. 興昌寺山 1号古墳 トレンチ2



21. 興昌寺山 1号古墳 トレンチ3



22. 興昌寺山 1号古墳 線刻画(船)



23. 興昌寺山 1号古墳 線刻画(葉)
(写真左側が上)



24. 興昌寺山 1号古墳 線刻画(不明)



25. 興昌寺山 1号古墳 石室玄門付近



26. 興昌寺山 1号古墳 石室奥壁



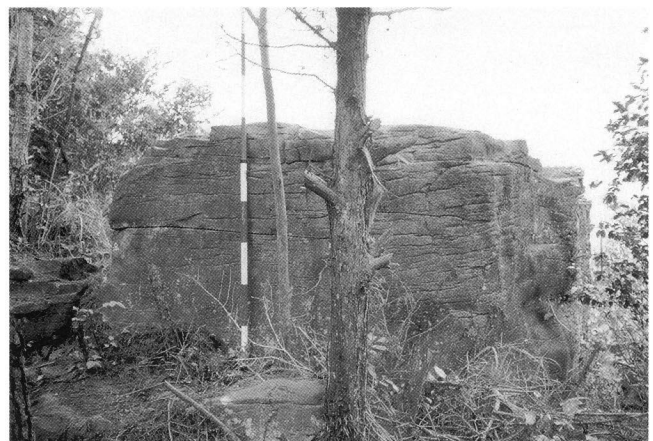
27. 興昌寺山 1号古墳 石室天井部



28. 興昌寺山 1号古墳
墳丘南側の土塁状地形と石積の状況



29. 興昌寺山 2号古墳 (現在)
【地図番号14】



30. 高屋神社北東部巨石群 (現在)
【地図番号25】

6. 【参考・引用文献】

- ・『香川県史 第1巻 通史編 原始・古代』S63.3.31 香川県
- ・『新編 香川叢書 考古編』S58.3.31 新編香川叢書刊行企画委員会
- ・『復刻版 史蹟名勝天然紀念物調査報告 上巻 (第1－第6)』S50.2.20 香川県、香川県教育委員会編 香川県文化財保護協会発行
- ・『復刻版 史蹟名勝天然紀念物調査報告 下巻 (第7－第15・附図)』S50.2.20 香川県、香川県教育委員会編 香川県文化財保護協会発行
- ・『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要Ⅱ』H5.3.25 (財)香川県埋蔵文化財調査センター
- ・『史跡有岡古墳群 (宮が尾古墳) 調査報告 ～史跡有岡古墳群 (宮が尾古墳) 保存整備事業に伴う発掘調査報告書～』H5.3.31 善通寺市教育委員会文化振興室
- ・『史跡有岡古墳群 (宮が尾古墳) 調査整備報告書』H9.3.31 善通寺市教育委員会文化振興室
- ・『三豊郡史』1912 香川県三豊郡役所 (株)名著出版 1973 復刻
- ・『観音寺市誌 通史編』S60.1.1 観音寺市
- ・『観音寺市内遺跡発掘調査概要報告書 平成10年度国庫補助事業報告書 丸山古墳』1999.3.31 観音寺市教育委員会
- ・『観音寺市内遺跡発掘調査概要報告書 平成11年度国庫補助事業報告書 丸山古墳Ⅱ』2000.3.31 観音寺市教育委員会
- ・『観音寺市の文化財 考古資料シリーズ編 創刊号』S47.3 観音寺市文化財保護協会
- ・『全国の装飾古墳シリーズ5 『中国・四国地方の装飾古墳』熊本県立装飾古墳館展示図録第13集』H11.10.19 熊本県立装飾古墳館
- ・井上勝之、玉木一枝「坂出加茂町木の葉塚 (サギノクチ1号墳の線刻壁画)」『古代学研究 第92号』1980.5.20 古代学研究会
- ・『香川考古 第2号』1993 香川考古刊行会
- ・『香川考古 第6号』1997.12 香川考古刊行会
- ・『石川巖遺稿・追悼集』S51.8.1 「石川巖先生遺稿・追悼集」出版委員会
- ・『高室の地名』H9.6 高室郷土史研究会

報告書抄録

ふりがな	かんおんじないいせきはくつちょうさがいようほうこくしょ							
書名	観音寺市内遺跡発掘調査概要報告書							
副書名	平成12年度国庫補助事業報告書 詳細分布調査概要報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	久保田昇三							
編集機関	観音寺市教育委員会							
所在地	〒768-0060 香川県観音寺市観音寺町甲300番地1 TEL 0875-23-3943							
発行年月日	西暦 2001年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こうしょうじやまいちごうこふん 興昌寺山1号古墳	かがわけん 香川県 かんおんじし 観音寺市 やはたちょう 八幡町 あざおつしっぽう 字乙七宝 乙12、乙18 乙16-1内	37205		34度 8分 7秒	133度 39分 9秒	20001016～ 20010131	15	観音寺市内 遺跡発掘調 査事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
興昌寺山1号古墳	古墳	古墳	古墳 1基	須恵器 土師器		<ul style="list-style-type: none"> ・埋葬施設 腰石を採用し、平天井の横穴式石室に玄門立柱が石室内部に突出する構造。 ・石室内には線刻画（葉、船など）が描かれている。 		

観音寺市内遺跡発掘調査概要報告書

平成12年度国庫補助事業報告書

詳細分布調査概要報告書

2001（平成13）年3月31日発行

編集・発行 観音寺市教育委員会

〒768-0060

香川県観音寺市観音寺町甲300番地1

電話 (0875) 23-3943

FAX (0875) 23-3925

印刷 株式会社 三和